

自由研究発表

民主化時代のインドネシア国軍
—プロフェッショナルな軍隊への変革—

Indonesian Armed Forces in the Democratic Period
: Transformation to the Professional Military

矢吹 真二郎 (防衛大学校)

Shinjiro Yabuki (National Defense Academy)

本研究は、1998年に生じた民主化後のインドネシアにおける国軍改革定着の要因を考察している。もう少し詳しく説明すると、スハルト時代に政治関与の強かった国軍が、民主化後にフォーマルな政治プロセスから制度的に撤退し、その状態がなぜ継続しているのかを、国軍のプロフェッショナル化を検証することをつうじて明らかにするものである。

20世紀後半からの民主化運動に伴い、東南アジアの権威主義国家の多くでは軍の政治からの撤退が行われた。しかしながら、ミャンマー、タイ、フィリピンに見られるように軍改革を成功させることは難しい。そういった中、改革の成功例と言えるインドネシアは特殊な事例と言える。

民主化後、インドネシアでは国軍議席の廃止、軍と警察の分離、軍の政治関与を禁ずる国軍法の制定等の軍改革が実施された。これらの主要な改革は2004年までに行われ、このことに関する研究も多くなされた。しかしながら、この軍改革がなぜ、どのようにして定着していったのかについてはさらなる研究の余地がある。先行研究では、軍改革の要因を改革圧力の強さや、政治家と軍との関係性により説明している。しかしながら、軍改革の継続性を考えた場合、軍自身の変化にも注目する必要があるだろう。

以上のような問題認識のもと、本研究では2004年までに行われた政治的観点を重視した改革(reformasi)から、それ以降も継続的に行われているプロフェッショナルな軍隊への変革(transformasi)過程に注目した。先行研究が重視していた政治的観点からの分析に加え、文民指導者から与えられた任務をいかに効率的かつ効果的に遂行するかという軍事的有効性の観点からも考察したのである。

本研究の結論として、装備の近代化や作戦効率の向上、2004年国軍法の規範を内面化させる教育、軍人の所得の向上等のプロフェッショナル化の進展と、スハルト時代の政治的役割を喪失した国軍が、非伝統的脅威の台頭等により民主化時代の社会の中で、新たな存在意義と役割を見出したことが、国軍改革を定着させた要因であったことを提示する。